2022年(令和4年)3月28日　月曜日　神戸新聞

正平調

昨年、神戸出身の2人の映画人が逝った。監督高橋一郎さん、プロデューサー鵜久森典妙さん。1980年代から手を携え、原発やアトピー、環境などを題材に数々の社会派ドキュメンタリーを残した◆最後の作品が「一人になる」。ハンセン病患者の隔離政策を進めた国に抗し、「不治の病ではない」と主張した医師小笠原登の生涯を追った◆高橋さんは昨年6月、上映後のシンポジウム中に倒れ、他界した。直前まで声高に訴えたのが、優生思想の問題だ。国は障害や病気のある人を差別し、社会から排除してきた。国民にこの思想を植え付けた責任は重い、と。公開に奔走した鵜久森さんも5カ月後、病没した◆2月と3月、旧優生保護法を巡る裁判の判決があった。不妊手術を強制された人たちが国に損害賠償を求めた訴訟で、大阪、東京高裁が旧法を違憲と判断し、国に賠償を命じた◆東京の裁判長は「差別のない社会をつくるのは、国はもちろん社会全体の責任」と法廷で異例の所感を述べた。ハンセン病と強制不妊手術。根っこは同じ優生思想だ◆過ぎ去った問題ではない。誰かが誰かを見下し、優劣をつけて排除する。そんな病巣が今もはびこる。私たちは目を背けていないか。2人の映画人が残した作品が問いかける。

2022・3・28